



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

岩本, 武和

---

CITATION:

岩本, 武和. まえがき. 岩本ゼミナール機関誌 2007, 11: 1-2

ISSUE DATE:

2007-02-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56964>

RIGHT:

## I. ま え が き

昔、どこかで読んだエッセイの中に、「音楽家には、直情的なヌア・ミュージカー(音楽だけの音楽家)と、問題意識に富んだ知的なアオホ・ミュージカー(音楽家でもある総合的知識人)の2種類いるが、音楽の進化にはどちらのタイプの音楽家も必要だ」といった内容が書かれていました。例として異論はあるでしょうが、ピアニストのアルグリッチなどは、私にはヌア・ミュージカーの代表に思えますし、ポリーニなどが、私にはアオホ・ミュージカーの典型に思えます。

間違いなく、エコノミストにも「経済学だけの経済学者」と「経済学者でもある総合的知識人」の2種類が共存しています。そこで思い出すのが、M.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の最後の強烈メッセージです。

「専門の仕事への専念と、それに伴うフェウスト的な人間の全面性からの断念は、現今の世界ではすべて価値ある行為の前提であって、業績と断念は今日では、今日ではどうしても切り離しえないものとなっている。……この認識は、豊かで美しい人間性の時代からの断念を伴う決別を意味した。……ピューリタンは職業人たらんと欲した、われわれは職業人たらざるをえない」(大塚久雄訳、岩波文庫、1989年、364頁)。

総合的知識人たらん欲し、かつ職業的経済学者たらざるえない私が、困難に陥ると、今でもこのウェーバーに解決の糸口を求めます。私は、「総合的知識人」たらんと欲しているが故にこそ、鼻持ちならない安直な経済学批判を侮蔑し、巧の技を有する「職業的経済学者」をむしろ尊敬します。その点は、岩井克人に代弁してもらうことにしましょう。

「理論の正しさは経験からは演繹できない。いや、経験から演繹できるような理論は、真の理論とはなりえない。真の理論とは日

常の経験と対立し、世の常識を逆なでする。それだからこそ、それはそれまで見えなかった真理をひとびとの前に照らしだす。アダム・スミスの〈見えざる手〉の理論ほど、日常の経験と対立し、世の常識を逆なでする理論もないだろう。……それゆえ、世間にひろく流布している経済学批判の多くは、まったくの的外れである。それらはたんにひとびとの日常的な経験をそのまま繰り返すだけの批判でしかない。……いわく、現実には市場における価格は経済学が想定しているほど自由には上下しない。いわく、現実の市場における資本や労働は経済学が想定しているほどには自由には移動しえない」(岩井克人『21世紀の資本主義論』ちくま学術文庫、2006年、22頁-23頁)。

抽象的なことを書きました。忙中暇ありで、藤沢周平の『たそがれ清兵衛』の映画(日本の映画賞を総なめにした山田洋次監督作品)の台本で見つけた、次の言葉に、上記の抽象的な内容は、ほぼ言い尽くされています。

「今読んでいるのは論語ではねえか……いつからそれを始めたよ。」「先月の終わりから……お師匠はんがこれからはおなごも学問しねばだめだっておっしゃったの。」「それはええことだ。おれも子供の頃何度でも何度も読んだでなつかしの。」「はん……針仕事習って上手になれば、いつさは着物や浴衣が縫えるようになるだろ。……だば、学問したら何の役にたつんだろう。」「学問は針仕事のようには役にたたねえかもよ。学問しれば自分の頭でものを考えれるようになる。この先世の中どう変わっても、考える力持てればなんとかして生きて行くこともできる。これは男もおなごも同じことだ」。

学問における研究や教育(初等教育から大学院教育まで一貫して)に対して、「それ何の役に立つの?」という問いかけほど、愚問はありません。井口清兵衛の言葉を借りれば、「学問をす

れば自分の頭でものを考えられるようになる」。もう少し突っ込むと、研究対象との距離が分かるにつれて、「自分とは何か」という問いかけができるようになる。学問とは、自己認識と自己表現の手段を獲得する手段の一つ。これが先の愚問に対する回答です。

残念なことは、冒頭で述べた直情的なヌア・ミュージカーたる「職業的経済学者」と、問題意識に富んだ知的なアオホ・ミュージカーたる「経済学者でもある総合的知識人」とが、経済学の世界では、互いに他を侮蔑ないしは黙殺しあっている現状でしょうか？ ただ、私は、徐々に両者の溝は縮まりつつあると楽観的に思っています。前者は、その仕事を突き詰めれば、後者に迫り着かざるを得ないし、後者も、その仕事を意味あるものにするには、前者の最先端業績を無視しては成り立ち得ないからです。

さて、岩本ゼミ 12 期生のみなさん、卒業おめでとう。みなさんは、先輩たちの学年に比べて、格段に仲の良い親密なグループだった印象があります。ゼミ長の大隈君のキャラクターが大きな影響を与えた学年だと思っています。2 回生のときから、きつい質問を發する先生と院生の TA の横に、ずっと隣で張り付いていた根性には、敬服しました。何度も危うい場面に直面した登地君を、このゼミを全うしたのは、大隈君と三谷君のおかげでしょう。塚田さんは、甲子園のビールの売り子で、記録を更新して知名度を上げてくれましたね。帰国組のハンデは全く感じさせない活躍ぶりでした。酒井さんは、合宿やコンパで面白い企画(讃岐うどんは最高の企画)を立ててくれたと同時に、ボケた注文も面白かった。長屋さんは、城崎合宿での「風呂入りに行かんか？」の反応が物凄く印象に残っているのですが、大学院進学後も、ちょくちょくゼミを覗いて下さい。一見クールに構えているように思える本君も、いざというときにはさすがの potentiality を如何なく發揮したくれま

した。

岩本ゼミは、毎年、いろいろなインゼミ・ディベート・合同ゼミ等に参加していますが、「日本政策学生会議(ISFJ)」において、「特別賞」を受賞したことは、快挙でした。グループ・リーダーの昼間君の努力に敬意を表します。

私は今年、とうとう fifties の大台にのってしまいます。この歳になって 3 歳児の子育てを楽しんでいます。最後に、thirties の大台にのってしまった多くの卒業生の皆さんに、次の詩を贈ります。

南の絵本

岸田衿子

いそがなくなつていいんだよ  
オリーブ畑の 一ぽん一ぽんの  
オリーブの木がそう云っている

汽車に乗りおくれたら  
ジプシイの横穴に 眠ってもいい  
兎にも 馬にもなれなかったので  
ろばは村に残って 荷物をはこんでいる

ゆっくり歩いていけば  
明日には間に合わなくても  
来世の村に辿りつくだろう  
葉書を出し忘れたら 歩いて届けてもいい

走っても走っても オリーブ畑は  
つきないのだから  
いそがなくでもいいんだよ  
種をまく人のあるく速度で  
あるいでゆけばいい

2007 年 2 月 10 日

岩本 武和

付記 本誌は、「京都大学経済学部学生学習研究支援経費」によって刊行されたことを、関係各位に感謝申し上げます。